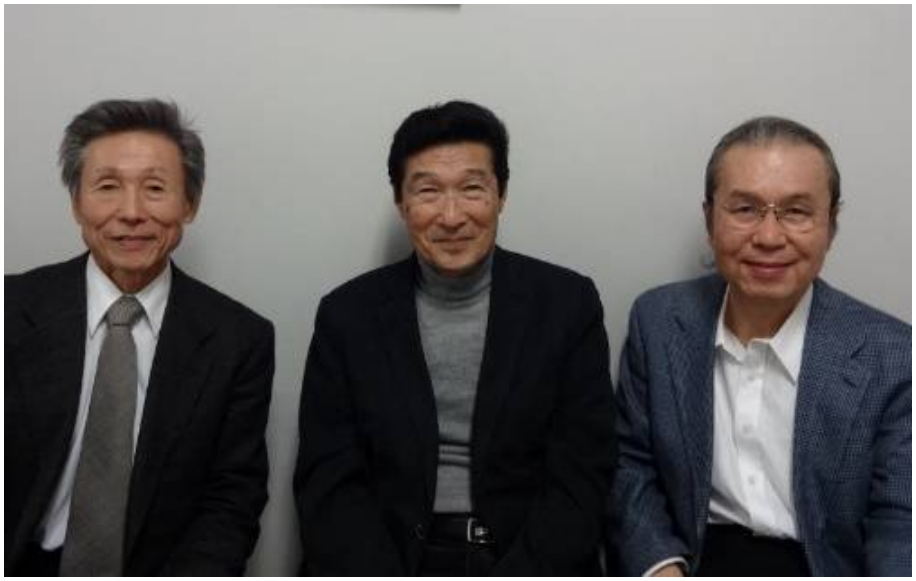
新春放談　合計 214 歳が語る日本と世界

吉野　永之助氏、澤上　篤人氏、岡本　和久

岡本｜　昨年の 12 月に二年ぶりにニューヨークへ行きました。1975 年から 1984 年までの 9 年間のニューヨーク駐在員生活を終え帰国してからちょうど 30 年。それで、家族で旅行をしたのです。

吉野｜　企画ものイベントですね（笑）。

岡本｜　そうです。10 年後の次回、私は吉野さんの今の年齢になってますね（笑）。しかし、まあ、その活気のあることには正直驚きました。人も、車も多い、騒音もすごい。まあ、クリスマス・シーズンということもあったのかも知れませんが、タクシーだって全然、つかまらない。毎回、ニューヨークに着くとまず、ロックフェラー・センターにあるカフェに行くのですが、ここも超満員。もちろん予約をして行ったのですがずいぶん待たされました。スケートリンクでスケートをしている人たちを見ながらみんな、楽しそうに食事をしている。家族でクリスマスを祝っている人、おじいちゃん、おばあちゃんと孫たちの食事、若いカップル、ビジネスマンのビジネス・ランチ、さまざまですが、とにかく大きな声で話し、けたたましく笑っている。迫力ありましたねえ。



澤上｜　物価は結構、上がっていた？

岡本｜　そうですね。やはり円に換算すれば高いなという感じですね。地元で暮らしている友人などはやはり生活が苦

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
発行人：岡本和久、発行：I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
URL: http://www.i-owa.com；E-mail: info@i-owa.com

しくなっているということを言っていました。原油価格が下がってもガソリンはほとんど下がっていないそうです。それでみんな生活の知恵でカー・シェアリングなどを始めていると言っていました。

吉野｜ シェール・オイルの売り上げを懐に入れるのとガソリンの売り上げは移転できないようですね。

澤上｜ でも、全体の感じとしては元気でしょう？

岡本｜ 少なくともマンハッタンは元気でした。外国から来ている人が多かったですね。駐在員時代にも行っていたのですが、ラジオ・シティ・ミュージック・ホールのクリスマス・スペクタキュラーというショーを観に行ったんです。ここも座席数 6000 人の劇場がすごい満員。毎日、3～6 回の公演をしています。それを 11 月初旬から大晦日までやっています。単純に計算すると 150 万人ぐらいが観るということになる。決して安いわけではない入場券ですがみんな、平気で払っている。

澤上｜ アメリカのバイタリティを感じるね。人口も増えているし。

岡本｜ とにかく移民も、観光客も人が集まってくる環境を作っている。イベントもたくさんあって世界中から人が集まる。人が集まればお金を使う、商売になる。

吉野｜ テレビでもアメリカの学者が日本はもっと良くなるために子供を増やすか、移民を入れるか、もっと人を増やさなければダメだと言っていた。成長するためにはそれが必要だと。

澤上｜ やはり人間が増えないとね。

吉野｜ アメリカは、土地はあるし、人間も増えていて、資源も豊か。全部揃っている。ほかの国はどこかが欠けている。やはり、単純に考えてもアメリカは有利だと思う。

澤上｜ ところがマスコミは「アメリカはダメだ、ダメだ」と言いたがる。

吉野｜ 言うんですよね。格差がどうだとか、銃社会で危険だとか。

岡本｜ 社会現象を見ていれば短期的には問題を抱えていることも事実でしょう。しかし、底力はすごいものがある。今の人、なんていうと年寄くさく聞こえるけど、若い人はやはり目先の現象にばかり注意が行きがちですよね。マーケットでもそうなんですけど。雇用統計だ、貿易収支だ、物価動向だと毎月の数字で一喜一憂している。そしてオーバーリアクション

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

をしている。

吉野｜　歳をとるとやっと悠久の世界の良さが分かってくる。若いうちにそんなこと言っても無理で、みんな短期で儲けたいと思っている。

岡本｜　しかし、本当は若い時こそ長い時間軸を持っている。そこのところはちょっと皮肉ですよね。だから、若いうちに自分の持つ時間という武器に気づいた人ほど大きな成功をするのでしょう。

吉野｜　アメリカの人は結構、社会の常識として長い時間軸を使うことのメリットを知っている。だから投信でも非常に長期に持って資産形成をしている。日本の人はその点、理解が足りない。ほんとに。

岡本｜　アメリカ人は消費が大好きで貯蓄率も低い。どうしてそんなことが可能かと言うと、私はやはり若い時から投資を行って、長期間それを続けることで退職後にそれなりの資金を得ているということが大きいのではないかと思うんです。

澤上|　なるほど。

岡本|　簡単な試算をしてみたのですが、30 歳の人が 65 歳まで投資をすると 36 年間という期間がありますよね。「72 の法則」で 2%で運用すると倍になる。3%だと 2.9 倍です。アメリカ人が仮に年収 300 万円相当だとして、毎年 50 万円を 36 年、年 3%で運用すると 66 歳の時には 145 万円相当になっている。日本人が 300 万円の収入から必死に年 100 万円を投資しても、ゼロ金利なら 66 歳の時にはやはり 100 万のままです。つまり、アメリカ人は少しリスクをとって運用をしているから就業中に使える資金は 250 万円、退職後も 145 万円があります。日本人は就業中に 200 万円しか使えず、しかも、退職後も 100 万しかない。もちろん、これからずっとゼロ金利が続くとは思いませんが、少しだけ余分にリスクをとることの効果が非常に大きいのです。

澤上｜　日本人にはリスクをとっていればいずれ増えていくという予感というか、確信めいたものがないですね。

吉野｜　まさに予感がないんですよ。ところがアメリカの連中はある程度、インテリであればみんな、増えるということを知っている。私もアメリカの投信を一本持っているんだけど、先日計算したら過去 10 年間で年率 12.7%のパフォーマンスですよ。これは信用するよね。

岡本｜　それはまた、10 年間持っていたからそうなったということでもある。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

吉野｜　その通りです。

岡本｜　その点、日本の投資家は短期で、上がっても売り、下がっても売っている。

澤上｜　そう、そう。だから実感できないうちに終わってしまう。ドイツの例が面白です。70 年代までは日本と同じで「国民に住宅を」というのが主な政策課題だった。だいたい行きわたってきたので 80 年代から国民の資産形成に焦点が移った。そのころに私は向こうにいて驚いたのは、当時はみんな投信という言葉すら誰も知らなかった。それが 80 年代の 10 年間でフランスもドイツもイタリアも個人金融資産に占める投信の比率がみんな 10%を超えるまでになった。日本はこんなに空き家が多くなっているのにまだ住宅政策を一生懸命にやっている。

岡本｜　やはり、家を持つことに対して相変わらず神話があるのでしょうね。ただ、ひとつ言えるのは退職後、家があるかないかでずいぶん負担が変わるということです。あまり住宅を持つことは意味がないという議論も結構ありましたよね。確かにローンの返済と賃料を比べればそのような議論もなりたったかも知れない。しかし、そこで浮いた資金をきちんと投資に回していたならいいのだけど、多くの場合、使ってしまっている。そのために、退職後も家賃を払い続けなければならないケースがあるようです。住宅を持っていればその負担はなくて済みますからね。

吉野｜　なるほど。退職をしたらローンを組むのも難しいからね。一流会社に勤めていると保証人なしでもローンを貸してくれる。これ本当にあった話です。そういう国なんですよね、日本って。それでなぜ、みんな大きな有名な会社に入りたがるのかが分かった気がしたんです。組織べったりのこのカルチャーは壊さないとだめですね。

澤上｜　だから村社会に浸っていることが安心で安全だと思っている。ある意味、ゆでガエル状態になっている。

岡本｜　個が確立していない。

吉野｜　物の考え方がみんなと同じだと安心していられる。それは非常に投資どには不向きな性格

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

でしょう。みんなと同じ投資をするのが安全だと思っている。

岡本｜ それで損するときもみんな一緒だと何となく安心していられる（笑）。自分だけ損するのを非常に嫌がる。自分だけ儲かったときは隠そうとする。

吉野｜ たまたま、ここにいる三人は海外生活も長かった。だから、日本社会のジレンマが見えてしまう。ROE が注目されるとみんな、「ROE、ROE」という。「ROE10%を目指す」とかね。

岡本｜ 気になるのは最終の数字しか注目しない。なぜ、その数値になっているかをあまり分析しない。

吉野｜ なぜ、ROE が重要かという議論があまりない。投資家の責任として会社を啓蒙し、本当の意味で良い会社にしなければいけない。社外取締役の人数だけ合わせたりね。「そんなんじゃないよ」と言いたい（笑）。

岡本｜ 2014 年は結構、象徴的な年だったような気がしますね。2013 年はアベノミクス・フィーバーでみんな、上がるから買うという状態だった。しかし、2014 年はちょっと違った意味で生活者全体に危機感のようなものが生まれて、改めて株式投資も考えなければいけないかなという風潮が出てきたように思うのです。澤上さん、ずっと各地を回られていてどうでしょうか？

澤上｜ 間違いなくある。特に女性の間でね。年金はあてにしない方がいい。だったら何かしとかなければいけないよねという考えの人が増えている。ただ、そこまでは分かっていても、なかなか一歩を踏み出せない。最近の勉強会でも 8 割ぐらいの人が投資未経験者です。そういう人が来だしている。

吉野｜ それはいい。澤上さんの勉強会は特にそういう人が多いのでしょうね。

澤上｜ やはり、ぶれないでやってきたということが大きいと思う。

岡本｜ よく馬を川辺につれて行っても喉が渇いていなければ水は飲まないといいますよね。まあ、投資家を馬に例えて申し訳ないけれど、馬は喉が渇いている。川も近くを流れている。しかし、川で水を飲むと溺れるかも知れないと言って喉の渇きを我慢しているというのがいまの状態でしょう。だから、怖くない水の飲み方を教えてあげるのが重要なのです。喉の渇きにだんだん耐えられなくなって、少しちらちらと川の方を眺め始めたというのが 2014 年だったような気がしますね。相場環境もそれほど悪くはなかったし。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

澤上｜　怖がっているばかりでは仕方ない。怖いけどやってみようという人が増えてきている。

吉野｜　その反対で失敗したのが 80 年代末のバブルとその後ですね。本当は怖がらなければいけないのに投機に飛び込んでしまった。本当はリスクがあるのに何も知らずに欲に駆られて訳もわからずにやってしまった。面白いのは、日本の相場動向の根底には外人投資家がいるんですよ。雑誌などを見ていてもアメリカの投資家の影響が強まってきたということ。これまで誰も言わなかった ROE などが注目されるようになった。利回りや PER などバリュエーション指標を重視するようになってきた。雑誌などがそれらを重視するようになってきたということは編集方針が投資家寄りになってきたということではないでしょうか。ある意味、外人投資家が大いに参加してくれることは日本の市場にとってもいいことだといえる。もちろん、外人投資家にもいろいろいるけれど、本格的な分析をしている外人が日本株市場の価格形成に大きな影響力を持つということはいいことです。

岡本｜　それはその通りですね。日本の投資家が外人投資家の投資哲学や分析手法を学ぶことは非常に良いと思いますね。ただ、上っ面の物まねになってはいけない。外人が「ROE が重要だ」と言っているから ROE さえ高ければいいのかというとそういうものではない。なぜ、外人が ROE を重視するのかということが理解されていなければならないですよね。

吉野｜　市場は常に上にも下にもオーバーシュートします。だから、市場と自分の位置関係、どこに自分がいるのかを客観的に見ている目が必要なんです。

澤上｜　マーケットを追いかけるのを投資だと思っている人が多い。証券の価値の高まりに着目していればいい。価格は価値の周りで大きく振れている。付かず離れずで見ていればいい。距離を置いて付き合っていればいいのだけど、多くの人がどっぷりとマーケットにつかってしまう。

吉野｜　常に現在の株価を投資家が正当化しようとしてします。それが後で見ると危険でね。

澤上｜　願望を込めてね（笑）。昨年から面白い実験が始まっています。5 年ぐらい、企業に話をしていてようやく昨年から実現したのです。製造業で工場が全国にある。その工場の工員さんと家族に、工場と自分たちは運命共同体なのだ、株主が変わったら工場閉鎖だってあるかもしれない、だから、そういうことがないように応援株主になろうと話をしてきました。ようやく 2014 年からその第一弾が始まった。第一部は社員、工員に長期投資の考え方を話す。第二部は社員の奥さんに工場に来てもらおうということでした。会社は最初、びっくりしていたけれどフタを開けたらびっくり。奥さんがたの参加者が全体の 3 割を占めた。そして、奥さんたちの反応がものすごい。真剣そのもの。自分たちの生活を支えている職場を実際に見る。そして、それを守るために応援株主になろうというものです。そして、みん

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

なで会社の価値を高めていこうというもの。これ、投資の基本ですよね。質の良い会社を選んでそのような活動を始めています。奥さん同士の話の中でも話題としてそれが出る。「お宅の会社、そんなことやってくれるの」という話が広まっています。これ、意外に面白い展開になりつつあります。

岡本｜　個人と企業の距離をどうやって縮めていくかということにもっとみんな努力をしなければいけないでしょうね。最近は投信会社でも受益者と投資先企業のコミュニケーションの場を設定する試みがなされている。これは非常に日本人にアッピールするやり方ではないかと思いますね。海外ではあまり聞いたことがないし、外人にそれを話すとみんなびっくりしています。

吉野｜　女性の時代といって女性を役職につけようというようなことを言うけれど、本当の女性の時代というのは女性が主体的にどう行動するかということです。澤上さんの話を聞くと、私は女性の時代に一歩踏み込んだなと思いますよ。

岡本｜　それをやっていると株主の立場だけではなくコンシューマー（消費者）としての立場にも影響が出てくるでしょう。応援株主ということだとね。

吉野｜　最近、ある企業のアニュアル・レポートの監修をしたんですけどね、読んでみると「株主」という言葉が 120 ページのレポートに一言もない。消費者向けの商品を作っている会社なんですけどね。とにかく、自分の言いたいことを言うので精いっぱい。ページが全部それで埋まっている。小さな字でね。「投資家様」という文字がまったくない。アメリカのアニュアル・レポートでは考えられないですね。真似しろとは言わないけれど、これはおかしい。「もっと投資家を意識した内容にしなければダメだ」とアドバイスしたんですけどね。いま、改革をしようとしている企業で、良い製品を出しているのでそれなりに消費者もつかんでいる。しかし、消費者が株主であるという意識はまったくない。ただ、「いいものを売りたい、しあわせを売りたい」そればっかり。わかりますけどね、その気持ちは。

澤上｜　海外のアニュアル・レポートはまず、株主様から始まるからね。そして、「わが社」ではなく「あなたの会社（ユア・カンパニー）」で一貫していますからね。

吉野｜　投資家にも株主になった以上、その会社を良くしていくという責任がある。だから、奥さんたちが消費者であり、株主であることによって会社は良くなっていけるのです。

岡本｜　企業ってどのように構成されているかと言えば、消費者がいて、従業員がいて、資本の出し手がいるわけです。でも、この三者に共通しているのは全部、生活者だということですよね。資本の出し手が年金であれ、投信であれ、銀行の貸付であれ、その源を遡っていけ

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

ばみんな生活者の資金です。ですから、私は消費者、コンシューマーの C、従業員、エンプロイーの E、資本のオーナーの O をとって生活者こそ、企業の CEO だといっているんです。普通は CEO って最高経営責任者ですが、本当の企業は CEO によって構成されている。

澤上、吉野｜　なるほど（笑）。

岡本｜　すべての企業を総体としてみれば結局、すべて生活者だよねということになる。だから生活者が企業に CEO の立場から働きかけて企業に良い活動をさせる。そして、良い社会を作るのに貢献させる。企業といっても結局、それは生活者の集合体として出来ているので、生活者が全体として望むような社会を企業を通して作っているとも言えます。消費者は世の中のためになる企業の製品を買う。これは選挙のようなものです。従業員は会社の内部で会社が正しい方向に向かっていることを確認し、それを逸脱するようなら声を出す。「部長、これはやっぱりおかしいんじゃないですか」という声を出す。昔だったら、藩主がご乱行でもすれば家老が切腹してでも諫める。まあ、現代ではそうはいかないですけれどね、時には首をかけて進言する。プロとしての倫理に反することはしない。そのような面がもう少しあっても良いのではないでしょうかね。そして、資本の出し手として企業に対して統治をおこなっていく。結局、良い社会を作るのは生活者であり、企業はそのツールだと思っています。

澤上｜　ドイツなどの場合だとギルトがあってプロフェショナルを守ってくれる。横の組合で特定の仕事をしている人たちの組織になっている。

岡本｜　まず、職業人、プロとしての自分という存在があり、その存在がどの企業でプロとしての仕事をするというのが本筋です。日本だとまず、自分という存在が会社の中にあって、会社の中で自分の役割が決められる。

吉野｜　労働の移転がない点が問題ですよね。入社したら親分・子分関係になってなかなか上に対して物を申すことができない。この関係を薄くするためにはもっと労働市場の流動性が高まる必要がある。

岡本｜　日本のナントカ業協会と

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

いうのは企業の集まりの色彩が強い。職業人としての個人を守る業界ではなく、業界内における企業の調和というか平和と安定（笑）を守るための存在になっている。また、行政も業界団体を通じて業界をコントロールしようという体質もある。それも日本の問題だと思います。

吉野｜ そうですね。企業の安泰ありきという考えですね。甲子園の高校野球に出る子たちはみんな坊主頭ですよね。私はあれが気に入らないですね。彼らには自由がない。束縛している。全員、同じ髪型でないと怒られる。ディズニーランドにいくでしょ。学校から生徒の団体が来ている。全員が同じジャージを着ている。いなくなると困るのでそうしているのだろうけれどね。でも、最近は同じジャージは嫌だと言う子が出てきている。そうでなければいけない。集合体ではなくて、もっと個人が生き生きとしなければいけない。少しずつ芽がでてきている。

岡本｜ 水族館で小さい魚がたくさん集まって一つのかたまりになっていますよね。大きい魚に狙われるとみんなが集まって大きく見せる。あれと似たメンタリティですね。

吉野｜ そう、そう。イワシとかね。弱いものが一緒になりたい。日本のサラリーマンは基本的に弱い。組合も弱い。

岡本｜ みんなと一緒に集団の中にいることが最大の保身になっている。

澤上｜ そういう社会の中で「ファイナンシャル・インデペンデンス」を目指すことをきっかけに自立を考える人が少しずつ出始めている。みんな、目を輝かして聞いている。20 代後半、30 代、40 代の女性が特にその意識が強い。

吉野｜ 何かぶち破りたいものがあるのでしょうね。

澤上｜ 閉じ込められているという強い感覚があるので、自分一人でもとにかく飛び出したいというところまできている。

吉野｜ 岡本さんはいろいろな中学や高校で授業をしていますよね。あれすごく興味があるのだけれど、何か最近、感じることはないですか。

岡本｜ 12 月の初めに岩手県大船渡の吉浜中学校というところで授業をしました。大船渡は明治、昭和、最近ではチリ沖の地震による津波と散々、被害を受けてきています。それで明治時代の市長が私財をなげうって山を買い、村全体を高台に移転したんだそうです。それで今回の大震災でもたまたま低地に用があって降りていた人一人を除いて被災者はゼロだっ

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

たそうです。

吉野｜ すごいね、それは！

岡本｜ そのような地域の中学校の子供たちが自分たちも人を助ける行動をとりたいという意識が非常に強いことを感じました。将来、何になりたいかを聞いてみるとみんな、しっかりと話ができる。東京の学校だと、まあ、心の中には希望があるのかも知れないけれど、モジモジして話をしない。でも、吉浜中の子供たちは、友達同士でも語り合ってそれをはっきりと表現できる。しかも、「金儲け」というより、「人助け」、「世の中のため」という意識が非常に強い。すばらしいと思いましたね。「潜水夫になって海をきれいにしたい」、「地元の食材を使ったレストランをやりたい」、なかには「ドラえもんになりたい」という声までありました。ドラえもんについては、学校にみんなの願いを書いた短冊がたくさんあったのですが、「ドラえもんがきてくれますように」というのがあって、「ああ、本当にそうだな、心の叫びなんだな」と思いましたね。ひとり、ひとり、何になりたいというのが明確なんです。

澤上｜ それはすばらしい。

岡本｜ 戦前、戦後を生き抜いた人たちってとても強いじゃないですか。満州から命からがら帰国した人など、体もしゃんとしているし、記憶も非常にはっきりしている。言葉も声もエネルギーに満ちている。人間ってやはり極限的な状況を経験すると何かスイッチのようなものが入ってエネルギー度というか、生命力がアップするのではないでしょうか。今回の震災でも、大変な体験をした子供たちのスイッチが入ったという感想を持ちましたね。いまから、20 年、30 年経った時には、この地域出身の若者が日本を背負ってくれるのではないかという期待も持ちました。

澤上｜ そうだね。

岡本｜ 都会の子供にはない強さを感じましたね。でも、概していまの子供は非常に優秀です。私の話もほとんどノートもとらないで聞いているのですが、感想文などでは非常に適格にポイントを理解していることが感じられます。ただ、決定的に足りないのがコミュニケーション、特に家庭内のコミュニケーションではないかと思います。結構、「初めて勉強は自分のためにしているということが理解できました」とか、「父親が会社で働いて、その月給が銀行に振り込まれ、そのお金が ATM から出てきていることがわかりました」などというコメントがあるんですよ。こっちが驚くぐらい当たり前のことを知らない。親も先生も「勉強しろ！」とは言ってもそれが自分にどう役立つかは十分に伝わっていない。ATM はただ、お金がでてくる機械だと思っていてその前提として労働があるということを聞かされていない。親が ATM からお金を出すときに一言、これは「お父さんが働いてくれている月給なのよ」と

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

いってあげればいいと思うんですけどね。みんな、忙し過ぎてコミュニケーションが不足しているのは痛感します。

吉野｜　本当に一言ですっかり変わる。一つのことに自信を持つとがらっとすべてが変わる。私の孫は非常にゴルフがうまいんです。その才能は私が発見したんだけれど、先生につけてゴルフの練習をさせた。そして、腕が上がるほどに宿題もきちんとするようになったし、字もきれいになってきた。一つのことで自信が生まれだすとすべてが良くなる。

澤上｜　その一言が重要なんだよね。

岡本｜　子供たちからはよく「なぜ、こんなにいろいろな教科を勉強しなければならないんですか」という質問を受けるんですよ。「じゃあ、君たちはどの分野を専門の仕事としてやっていきたいか決まっているの」と聞くと、まあ、普通は決まっていない。「じゃあ、いろいろな教科を勉強してその中で自分が本当に好きになれそうな分野を探したらどうだい」と言ってあげるとすごく安心する。

吉野｜　そう、自分が本当に好きなことをひとつ見つければいい。

岡本｜　でも、学校ではすべての教科でいい点数をとるように指導している。それで子供たちは大きなストレスを感じてしまう。こんなのもありました。「私は親からしっかりと将来の目標を持って良い大学に入るために勉強をしなさいと言われています、でも私は将来の目標が決まっていないので何をして良いのかわかりません」というんですね。だから、「私も中学や高校のころには何になりたいなんて決まっていなかったよ、だから、足もとのことを一生懸命にやっていたら自然に道が拓けてきた。君たちも将来の目標が決まっていないなら、いま、やらなければならないことを一生懸命にするしかないじゃないか」と答えてあげる。そうするとすごく安心するんですね。「あ、この人も自分ぐらいの時は将来の目標なんてなかったんだ」ってね（笑）。

澤上｜　それが重要だよね。

岡本｜　勉強は将来の自分のためなんだということを教えないで、ただ、「勉強しろ」と親も先生も言うから、勉強は親と先生のためにやっていると勘違いしてしまう。

吉野｜　私の妻が昔、息子に「勉強しなさい」ということを言ったら、息子が「じゃ、お母さんがやったら」と答えた（笑）。これ名言だって（笑）。

岡本｜　やはり、我々の世代になると子供の教育というのは本当に重要だと感じますね。これは

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

親が子供に教えるというような問題ではなく、先に生まれた世代が次の、あるいは次の次の世代の人的資産を形成していく責任があるということだと思うんです。我々の役割も大きいと思います。今日は有益な話をありがとうございました。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社